

学位論文内容の要旨

学位申請者	河田 真理 【比較社会文化学専攻 平成20年度生】	要 旨
論文題目	キリスト教ワーシップダンスにみる両義性 —踊り手の内的体験と相互行為に着目して—	<p>本研究は、キリスト教のダンス実践である「ワーシップダンス」において、踊り手がその身体を通して他者との「関係」をどのように生き、またその「関係」が実践にどのようにあらわれるのかを実証的に捉え、「両義性」という概念を用いてワーシップダンスを貫く「関係」の具体的様相を明らかにすることを目的としている。研究は、『聖書』とその関連資料の調査、及び筆者が欧米で行った3件のフィールドワークから得られた資料の分析によっている。</p> <p>その結果、ワーシップダンスの歴史の変遷において、「神—人」のつながりと「人—人」のつながりとは、相互に呼応する関係にあることが示唆され、このことは、現代ワーシップダンスにおける踊り手の内的体験において、神（聖霊）との自他非分離的關係を軸に据えた、「他者（外界）に貫かれつつ、自己に収斂していく」という両義性を孕む体験としてあらわれ、また、実践においては「他者の身体に巨視的な自己をみる」という踊り手間、さらに踊り手—観衆間の同調反応にみる鏡像關係の成立として具現化していることが示されたとしている。そして、踊り手の内的体験と相互行為にみられるこうした「人—人」のつながりの基底には、「踊り手—神（聖霊）」の自他非分離的対話を通して「個」の境界を超越しようとする踊り手の深い精神性があることが見出され、このことこそ聖書時代の礼拝行為としてのダンスにも通じるワーシップダンスの神髄であると考察している。</p> <p>以上のことから、現代ワーシップダンスにおける「つながり」とは、「踊り手—神」「踊り手—他者（外界）」との関係において、「動かされつつ、動く」というように、受動的感覚と能動的感覚とのせめぎ合いによる自己への志向と外界への志向との両義的なプロセスを通して紡ぎだされるものであり、それはまさに、自己・他者・神との関係における「調和した動き（在り方）」を模索する行為そのもの、すなわち、自己・他者・神との関係における真に「調和した生き方」の模索であると結論づけている。</p>
審査委員	(主査) 教授 柴 真理子	
	教授 猪 崎 弥 生	
	教授 松 崎 毅	
	教授 佐々木 泰 子	
	名古屋大学 教授 大 谷 尚	